大学硬式野球部・野球同好会における達成動機、

自己決定理論、スポーツコミットメントの差異

スポーツマネジメントゼミナール　1314041　寺村　弘太郎

１.研究動機・研究目的

価値観は、個人や集団の利益になり、行為に方向性と強度を与え、行動基準を与えるものであり、それは人の属している社会集団に支配的な価値観から習得され、ある個人の経験から学ばれる。スポーツの価値観の形成は、人々のスポーツへの参加に大きく影響を及ぼしている。

三戸（2003）は、大学生のスポーツ価値観を、その価値形体を明らかにしている。しかし大学生全体の調査では、大学に属する個人個人のパーソナリティに違いを明らかにできないと言われている。競技種目を絞ることで、競技特性、個人間の人格特性により差が出るのではないかと考えた。

今回は「野球」という競技種目に絞った。理由としては、私自身小学生から高校までの 12 年間、野球競技者として競技を行ったことが一つの理由である。また、日本の野球競技の現状はどうだろうか。高校野球を例に挙げると、全員が同じ髪型で、監督や先輩の前では礼儀よくしている。これは、一人ひとりの個性、パーソナリティが尊重されてないように思われる。選手たちは、そのような環境の中で本当にスポーツの価値を見いだせているのだろうかと疑問を感じたことも理由である。

本研究の目的は、団体スポーツ競技者の中でも野球に特化し、各大学に所属している硬式野球部と部活動ではない野球サークル活動を比較することで、スポーツの競技特性、人格特性を様々な尺度で測定し差を明らかにすることであった。

２.研究方法

１）調査対象者：J 大学硬式野球部(50 名)、R 大学硬式野球部（26 名)、H 大学野球同好会（30 名)、T 大学硬式野球部（22 名)、その他（6 名）の計 135 名

２）調査期間：2017 年 10 月 30 日～2017 年 11 月 5 日の１週

３）調査方法：Google form による web アンケート調査

４）調査項目：（１）個人的属性（２）スポーツ価値観に関する項目(三戸,2003)、（３）達成動機尺度(堀野、1987)、（４）自己決定理論に基づく動機づけ尺度（佐藤・藤田・森口,2009)、（５）スポーツコミットメント尺度（平野,2013)

５）分析方法：SPSS Version21 を用い、記述統計、MANOVA

３.主な結果と考察

本研究ではスポーツ価値観を様々な尺度を用いて測定した。硬式野球部・野球同好会の差を明らかにする分析のため、8 つの仮説を設定し、各仮説の検証を行った。

その中で、特に有意差が現れたのが所属先の個人属性である。

作業仮説では、所属する学校または所属団体は、達成動機の「社会的欲求」「個人的欲求」、「挑戦・成功欲求」、自己決定理論の「内発的動機付け」「統合的調整」「同一化的調整」、スポーツコミットメントの「楽しさ」「他者からの期待」「称賛」「有能感」の因子に差が見られると設定した。

結果は、所属する学校または所属団体の個人的属性には、達成欲求とスポーツコミットメントに差が現れた。特に有意スコアが高かった達成欲求の挑戦・成功欲求の因子においてH大学野球同好会と T 大学硬式野球部の値に最も高い有意スコアが示された。全体的な有意スコアを比較しても野球同好会と硬式野球部の有意が全てである。野球同好会に属することで人間関係の形成への意欲が高い反面、挑戦的意欲や何かの目標を成し遂げようとすることへの意欲が硬式野球部に比べて低いということがわかる。また、T大学硬式野球部はその中でも達成欲求に関する数値が他の５団体より高く、社会的達成欲求では監督、コーチ、保護者からの評価やチーム内で立てた目標に対して、他の団体よりもチーム全体が認識し達成しようとする意欲が高く、個人間でもそれぞれが目標を掲げ挑戦的に達成しよう、成し遂げようとするのが他の団体に比べて高いと言える。

スポーツコミットメントにおいては、仮説で設定した他者からの期待、有能感という因子は、有意なスコアを示した。他者からの期待、有能感においては、H大学野球同好会とT大学硬式野球部に差を示し、硬式野球部は、野球同好会に比べて、監督・コーチや選手間での勝利に対してや結果に対しての期待値が高い。また、硬式野球部は野球同好会に比べて、野球に対しての自信、上達志向が高いことが言える。所属先においては、硬式野球部と野球同好会に大きな意識的な差があり、硬式野球部は他者からの期待を受けながらも自ら目標を設定し達成しようとする意志が高いことが結果から言える。

４.結論

本研究では、団体競技スポーツの中でも野球に特化し、大学野球部・同好会に所属する学生の競技特性と人格特性の差異に関する研究であった。大学ごとでまたは硬式野球部と野球同好会の間で、野球に対する団体ごとの特性や野球に対する意欲度が見られた。達成意欲を上げることは、明確な目標設定を団体や個人の中で設定することさらに団体全体で目標達成の可能性 50%の目標を設定することで、団体の野球意欲は上がると認識した。

またポジションの項目では選手と学生監督・コーチに有意なスコアが示しているが、選手の場合野球をすることで喜びや勝利を味わえるため内発的動機付けが高いが、監督・コーチの場合野球している選手を管理し、戦略やチーム分析をしなければならない立場がゆえに内発的動機付けも外発的動機付けもないため、選手間と監督・コーチでの野球に対する姿勢が変わるため認識を深めるべきである。

５．卒業論文の執筆を終えて

本研究を進めるにあたり、指導教員の小笠原悦子教授、スポーツマネジメントゼミナール大学院生の方々、アンケートに快く答えてくださったＪ大学硬式野球部の方々、R大学硬式野球部・野球同好会の方々、H大学硬式野球部の方々、T大学硬式野球部の方々、K大学硬式野球部の皆様に心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく謝辞に返させていただきます。